狐、狸……それから獅(しし)

紅月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐、狸……それから獅（しし）

【Ｎコード】

Ｎ９０７７Ｑ

【作者名】

紅月夜

【あらすじ】

Ｔｗｉｔｔｅｒで滾った浦夏の発展版。通称“三竦み”（笑）

夏梨ちゃんは皆に愛されてるといい！！

狐と狸の化かしあい（違

暗闇の中、もぞりと影が動いた。
影は完全に起き上がると、ぐるりと水色の瞳で辺りを見回した。

「どこや、ここ？」

影の目に入るのは、使い古され傷だらけの卓袱台や箪笥。それから、閉められた襖。そろりと影が襖に手を伸ばすと、向こう側から開けられた。

「漸く起きましたか、市丸サン」
「アンタは……浦原……喜助……？」
「ええ、そうですよ。此処はアタシの家なんで」

襖を開けた相手は市丸が最後に見たときと同じ服装をしていた。違うのは、その手に握られているのが刀では無く、扇子だということぐらいだろう。

「ボク、なんで……？」
「勝手ながら助けさせて頂きました。といっても、瀕死の貴方の魂魄をある程度治療して義骸に入れただけですが」

市丸は改めて自分の手を見た。襖の向こうから漏れる光に翳すようにして。

「義骸……」

「その義骸、アタシ特製の義骸でしてね。入ってる魂魄の霊子を分解し続けるんです」
「……前にルキアちゃんが入っとったやつか……」
「……はい」
浦原は目を伏せ、暫く間を空けてから答えた。
「知ってると思いますが、その義骸に入ってる限り貴方の霊力は戻りません」
市丸は、まるで聞いていないかのように自分の手を矯めつ眇めつ眺めている。
「アタシを恨んでくれても構いませんよ？」
「……なんでや？」
「霊力が戻らないということは、貴方は松本副隊長に会えないということになります。貴方が彼女の為に藍染の側に付いていたのは知っています。……だから、貴方はアタシを恨んでもいい」
「……ああ……乱菊のことか……別にそんなんやないから、ええねん」
するりと翳していた手を下ろし、市丸は逆光で影となっている浦原の顔を見上げた。
「それに、ボクの霊力が無いんはアンタのせいやなくて藍染隊長に斬られたせいやろ？恨むも何も無い思うけど？」
それとも、恨んで欲しいんか？と、市丸はいつかと同じような表情を浮かべながら嗤った。

「……気付いてたんスか……」
「藍染隊長に斬られたときに、あぁこらあかんって思ったんよ」
市丸は下ろした手を再び持ち上げ、藍染に斬られた場所に触れた。
「あの時、藍染隊長はボクがもう戦えないように、戦えなくなるように、ここを斬った」
「……そのおかげで、貴方はもう戦えない、霊力を持たない魂魄になりました」
一拍おいて、浦原は続けた。
「貴方はこれからどうします？」
浦原の問いに市丸は首を傾げつつ、問いを返した。
「どうって？」
質問に疑問で返され、浦原が黙っていると、市丸は更に疑問を重ねた。
「ボクに何かやらそう思てボクを助けたんやないの？」
浦原は目を丸くしながら、口許を扇子で覆い隠した。
「アタシそんな酷い人に見えます？」
「ちゃうん？」
「違いますよぅ」
心外だみたいな風に言った浦原は暫く落ち込んだふりをした後、急

に口調を改めた。

「実際、アタシはあまり何も考えずに貴方のことを助けました」

「珍しいこともあるもんやなぁ」

「茶化さないでくださいよ。……だからこそ、今訊いているんです。貴方がこれから何をするのか。その返答次第ではアタシは貴方を殺さなきゃいけなくなる」

瞬間、ぴりっとした空気が二人の間に流れた。

「……安心してええよ。別に今なぁんもやる気無いから」

それに、と市丸は続けた。

「ボク、そんな殺されるようなこともともとしてへんで？」

「……そうですか」

浦原は帽子を被り直し、くるりと市丸に背を向けた。

「貴方なら、そんな状態になっても黒崎サン辺りを次の獲物にするとか言い出しそうだと思ってただけなんで」

「酷いなぁ。ボクそんな人間に見える？」

「さっきの貴方の言葉、そのままお返ししますよ」

「あらら、こらやられた」

市丸がとぼけたように言うと、浦原もとぼけたように返した。

「まぁ、暫くの間ならここに居てもいいっスよ。貴方のことは尸魂界には言ってないんで、いつまでもってわけにはいきませんが」

市丸は数秒悩んだ後、浦原を見上げて言った。

「んー、ほな、暫くの間宜しゅう」

狐と狸の化かしあい（違（後書き）

市丸隊長って設定じゃ「京都よりの大阪弁」らしいんですよ。ってことで、大阪弁っぽく書いたら、「北摂の大阪弁」になりました。
なんかこれ違うｏｒｚ
相変わらず市丸隊長は口調が難しいです……
「京都よりの大阪弁」がわかる方、訂正あったら教えてくださいませｍ（＿＿）ｍ

此処まで読んでくださり、有難う御座いましたっ！

狐の獲物（だから違

市丸は、数日後には浦原商店を出ていった。『別に行くあてなんか何処にも無いけど、まぁなんとかなるやろ』と、言い残して。

「いやー、まさか何するのもお金いるとは思てなかったわ」

市丸はベンチに座って、玉蹴りをしてる子供を眺めながらそう呟いた。世間は今日が日曜日らしく、目の前では子供が朝からずっと走り回っている。

「……お腹空いたなぁ」

市丸は浦原商店を出てから、三日間何も食べていない。公園に備えつけてある蛇口で水を飲んだぐらいだ。

「なんていうか、この感覚久しぶりやなぁ」

動けない程では無いが、ちょっとした危機感を感じるぐらいに腹が減るということは死神になってから殆ど無かった。

「このままボク死んだらどないなるやろ」

「悲しむ人がいるんじゃないの？」

「おんのかなぁ、そんな人……って、あかんあかん幻聴が聴こえて

きた」
「ちょっと、人を勝手に幻にするなよ」
「なんや幻覚もかいな。人やのうて食べ物のほうが良かったなぁ」
「あんたお腹すいてんの？あたしのお弁当食べる？」
「おー、言うたら食べ物出てきた。幻ってえぇなぁ」
「おっさん大丈夫かよ？ほら、玉子焼き食べていいよ」
「味のする幻やぁ……ってあれ？ホンモノ？」

市丸はもぐもぐと口を動かしながら、何時の間にか隣に座っている小さな影を見た。

「ホントに大丈夫かよ、おっさん」

まず市丸の目に入ったのはメッシュ生地の赤い野球帽。よく見ると「15」と青いアップリケがついている。そのまま目線を下げると見覚えのあるような顔と黒い髪が見えた。

「きみ、誰？」
「はぁ？」
「なぁんか見たことある気がするねんけど……あかん、思い出されへん……」
「……少なくともあたしはおっさんとは初対面だと思うけど？っていうか、さっきからフラフラしてるけどホント大丈夫か？」

黒髪少女は、Tシャツ Gパンという見た目にそぐわぬピンクの可愛らしいお弁当をベンチに置いた。そして、ひょいっと市丸の前に立つと、自分と市丸の額に手を当てた。

「うん、熱は無いみたいだね。けどちょっと体温低くない？朝ご飯とかちゃんと食べてる？」

少女の言葉が本当なら市丸とこの少女は何の面識も無い筈だ。なのに市丸は少女に心配されている。

「きみ、変な子やなぁ……」

「……変なのはおっさんの頭じゃないの？で、朝ご飯は？」

「……食べとらんけど」

「ちゃんと食べなよ！朝ご飯食べないと元気出ないだろ？」

「というか、昨日の晩御飯も食べてへん」

「……朝と昼は？」

「食べてへん」

「おっさん……最後にご飯食べたのいつ？」

「一昨日……先一昨日……あたりちゃうやろか？」

「……なんで食べてないの？」

黒髪少女の気迫に押されつつ、市丸は正直に答えた。

「ご飯なんて持ってへんし、お金も持っとらんし……あても無いし？」

「……おっさん無職？」

「……ちょっと前まではちゃんと仕事してたんやで？」

「よーするにクビになったわけだ」

「いやーうん、なんやちゃうけどまぁそんな感じ？」

嘗て市丸は尸魂界にある護廷十三隊の三番隊隊長だった。そして自分の意志で組織を抜け、且つ反乱を起こして云々……などと現世に生きる黒髪少女に言ったところで仕方がないので適当に流した。

「とりあえず……おっさん！」

びしっと黒髪少女は市丸に指を突きつけた。

「僕おっさんちゃうねんけど……」

「あたしからすりゃ十分おっさんなの！そんなことより、うちにおいでよ」

「へっ？」

素っ頓狂な声とともに、黒髪少女からは市丸の水色の眼が見えた。

「ご飯食べていけ」

「……なんで？」

「このまま餓死されたりしたら気分悪い」

「えっと……ええの？」

「多分、いい。というか、うちの親父は断らないと思う」

妙な確信を持って言う少女。

「ほな、お邪魔させてもろてええ？」

「いいって言ってんじゃん。あ、名前言ってなかったね。あたし夏梨。『黒崎　夏梨』おっさんは？」

「せやから、ボクおっさんちゃうて……ギンや。ボクの名前は『市丸　ギン』よろしゅう」

狸の獲物（しつこい

「おんや、まあ夏梨サン、いらっしゃいませ」

季節外れの扇子で口元を隠し、ぱちくりと目を瞬かせて浦原は来客を歓迎した。

「……なにさ」

「いえいえ、ただ珍しいと思っただけですよ」

浦原は、ぱちんっと音をたてて扇子をとじた。

「はてさて、今日は何用で？」

「いや、別に用って程のものは何も無いんだけど」

「何も無いって割に、今日はいたくおめかししてるんですねぇ」

浦原の言葉通り、今日の夏梨は普段のGパンTシャツと違い、スカートを穿き、髪を二つにくくっていた。

「あたしの趣味じゃないよ！」

「あら、お姉さんの趣味ですか？」

「……違う」

「……なら、お父さんの趣味ですか？」

「……それも違う」

「じゃあ、お兄さんの？」

「そんな訳ないじゃん。まだ意識戻って無いのに」

浦原の頭の中で、銀色の髪の少年の姿がちらついたが、いやいやまさかそんなと一つ頭を振って追い出した。

「家族じゃないなら、お友達ですか？」

「友達っていうか……」

言い渋る姿もまた珍しいと浦原はまじまじ眺めていると、夏梨に睨みかえされた。

「じろじろ見んな！」

「えぇっ！こんなに可愛いのに！！」

「うっさい！居候！居候にやられたの！！」

浦原は考えた。黒崎家の居候といえば朽木ルキアだ。しかし彼女にこんな趣味があったろうか。

「言っとくけど、ルキアちゃんじゃないよ」

考え込んでしまった浦原に夏梨が声をかけると、浦原は更に考え込んでしまった。

「……アタシと趣味が合いそうですね」

「はい？」

「なんでもありませんよぅ」

夏梨の胡乱げな目線を浦原はあっはっはと笑って流した。

「それで、どんな方なんです？」

「どんなって……背が高くて、目が細くて……」

「ほうほう」

「あ、髪の毛が銀色で冬獅郎みたいなんだ！」
「へぇ……？」
一瞬冷たくなった浦原の雰囲気に気付くことなく夏梨は続けた。
「性格は……なんだろ、狐みたいな蛇みたいな……うーん、狐っぽい？」
すっと浦原は目を細め、声だけは優しく夏梨にたずねた。
「その方のお名前は、何て言うんですか？」
「え？ああ、市丸だって。『市丸　ギン』」
浦原にとって聞き覚えのあり過ぎる名前。しかし何故彼が彼女の家に居候することになったのかは見当がつかない、つきたくない。
「もしかして知り合い？」
険しい顔をして黙り込んだ浦原を見てどういう風に思ったのか、彼女には似つかわしくない不安そうな声で尋ねてきた。
「……知り合い……知り合い？　知り合い、なんですかねえ？」
どう思います？　と、顰めていた顔をいつも通りの飄々とした顔に戻して、浦原は首を傾げた。
「訊いたのはこっちなんだけど……」
「いやー、名前だけではなんとも」
「大体の容姿は言ったと思うけど？」
「……ほら、他人の空似って言葉が」

「うち来て会う？　今なら家でテレビ見てると思うよ？」
「え、そのー、あ、お父さん！お父さんは何も言わないんですか？年頃の娘が二人もいる家に大の男が居候って」
「……あたし、居候が男だって言ったっけ？」

浦原の顔に、でかでかと“しまった”という文字が出た。夏梨は悪戯が成功した子供のように、にやりと笑って、

「知り合いなんじゃん」

浦原はゆっくりと両手を上げ、降参のポーズをとると一言。

「ちょっと前までウチで居候してたんですよ」

へえ、と気のない返事を言った後、夏梨は浦原の帽子の中を覗き込むようにして、じゃあさ、と声を上げた。

「じゃあさ、引き取ってもう一回ここで居候させてやってよ」
「は？」
「あいつ、あたしと遊子と親父が何言っても働かないんだ」

狸の獲物（しつこい（後書き）

お久しぶりです、こんばんはー。

今更ですけど、この話、ベースとして短編の「アタシは彼女に恋をした」があったりします……多分読んでなくてもいけると思います……多分。

段々日番谷隊長の出番が近付いてきてますよ！予定では次の次ぐらいなんですけど……予定通りいくかな……？

ではでは、ここまで読んでくださり、ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9077q/

狐、狸……それから獅(しし)

2011年12月23日01時46分発行